

平成 26 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2014

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジアⅡ講座 准教授
氏名 Name	村上 忠良
専門分野 Academic Field	タイ地域研究・文化人類学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	宗教実践における声と文字
<p>東南アジア地域をフィールドとして、歌や語り、写本、図像、出版物、電子メディアなど「メディアの同時共存状態」と、これらのメディアに関する「口承と書承の身体行為の同時共存状態」について、京都大学地域研究統合情報センター共同研究（公募）「宗教実践における声と文字—東南アジアからの展望」を研究代表者として組織し、東南アジア、南アジア、東アジア地域の研究者による研究報告と意見交換を行った。</p> <p>この共同研究を通して、「声と文字」という一対の関係に留まらず、声も文字もその他の宗教実践との複雑な関係を有していることが明らかになり、以下の3つの知見を得ることができた。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 宗教実践において文字がもつ意味は、聖典語や俗語の文字知識の有無という単純な指標では測れず、読めるが書けない「識字者」、聴くことでテキストを享受する大衆、読書によって新たに生み出される語りなど、相互に関連する声と文字の運用形態の重要性。2. 声と文字は単に相互関係を持つだけではなく、さらに図像、絵画、演劇、音楽、聖像・聖遺物との関係へも開かれている。経典と歌の関係、絵画と音楽の関係、図像と文字の関係、モノ（聖像）とコトバ（語り）など、声と文字の関係からさらに広がる他のメディアとの協働関係の重要性。3. 文字に関わる身体行為（声の実践を含めた）によって生み出される書かれたものの聖性や、作者・翻訳者・写筆者によって書かれたものが作成される過程自体が有する歴史的意味の重要性。 <p>この共同研究における個人の研究としては、東南アジア大陸部の仏教徒少数民族シャンの仏教文書を、タイにおける仏教文学の研究成果や人類学者の民族誌記述と比較検討し、その特徴を明らかにした。シャンの仏教文書においても、タイの仏教文学においても、そのテキストは朗読したものを拝聴する形でテキストが享受される形態を有していること、また朗読者に関しては僧侶のみならず在家の朗読者もいたことが共通点として明らかとなった。一方でタイの仏教文学においては在家者の朗読が 20 世紀半ば以降衰退したのに対し、シャンの仏教文書朗読の慣習は現在においても継承されていること、そしてこの違いは、学校教育や近代メディアの浸透による「伝統的知識の衰退」がタイ国において先に生じたということではなく、両者の仏教をめぐる、特に仏教文書をめぐる「制度化」の違いに起因する可能性があることを指摘した。</p>	